**地蔵院**

地蔵院は１３６７年に細川頼之（１３２９−１３９２）によって建立された。細川頼之は室町時代に要職を歴任した細川家の始祖と言われる。二代将軍義詮の遺命によって１３６７年に頼之は管領となり、当時１０歳だった三代将軍の後見人となった。頼之は地蔵菩薩像を安置する地蔵院を建立した。地蔵菩薩は、幼い将軍のような子どもの守り神といわれ、幕府を支配していた足利家の信仰の対象でもあると言われている。頼之は彼の帰依した禅僧の碧潭周皎禅師（１２９１−１３７４）を寺の初代住職として迎えた。現在の寺の一番の名物となっている枯山水の庭を作庭したのは碧潭周皎禅師とされる。

頼之の支援と皇室や足利将軍家とのつながりのおかげで地蔵院は１７万㎡の敷地を持ち、２６の別院を設立するまでに拡大した。しかし、守護大名同士の勢力争いなどにより争いが広がった応仁の乱（１４６７−１４７７）の際に、細川家と対立する勢力によって寺院は完全に灰燼と化した。平安時代（７９４−１１８５）に遡る本尊の地蔵像や頼之像の頭部など焼失を免れたものもあった。細川家は九州地方にその勢力を集中させ、京都に残した地蔵院は荒廃の一途をたどった。

数世紀後、江戸時代（１６０３−１８６７）初期に細川家の援助により方丈が再建された。